

ICIS第3回国際シンポジウム

「文化交渉としての宣教・布教 —近代以降の新しい趨勢」

総合討論

- コーディネーター（司 会）—————
陶 徳 民（関西大学ICISリーダー）
- コーディネーター（コメント）—————
小 田 淑 子（関西大学ICIS）
- パネリスト—————
中 牧 弘 允（国立民族学博物館教授）
土 屋 博（北海道大学名誉教授）
徐 以 驊（復旦大学アメリカ研究センター教授）
劉 家 峰（華中師範大学東西方文化交流歴史文献センター長）
宮 本 要太郎（関西大学文学部教授）
伏 見 英 俊（関西大学ICIS）
岩 本 明 美（関西大学非常勤講師）

陶 今日一日、皆さんもお疲れになっていると思います。プログラムでは5時までですが、5時半までになるかもしれません。

順序として、まず、イスラームの研究者でもあります小田先生に、主に仏教とキリスト教に関する今日の発表へのコメントをお願いします。それから、パネリストと講演者の間でお互いに質問を行います。またフロアからもすでに4枚の質問状を受けています。それではまず小田先生、どうぞ。

小田 今回のシンポジウムではコメンテーターを配置していませんでした。私はキリスト教や仏教の専門家ではありませんが、今日の発表を非常に面白く聞かせていただきました。

午前中は個別事例の研究発表で、宮本先生はハワイにおける日系の宗教について発表されました。教団を単位として出ていった日系宗教は移民や移住者たちに受け入れられ、ハワイで新しい民族たちとも交じり合いながら定着していった。写真を見ると、内陣は伝統的で日本風ですが、その外側の空間は（キリスト教）教会風になっているあたりに、定着の様子を知ることができました。

岩本先生のお話は、禪の老師など個人の布教がどのように外国の人々を惹きつけてきたかの

話でした。日本発でありながら、日本仏教と同じではない。チベット仏教などの影響も受け、經典学習を取り入れるなど、伝統的な仏教に戻る一面を持つと言えるでしょう。日本仏教では厳密に守られなかった戒律も遵守し、現代アメリカ社会で規律正しい修行基盤のうえに瞑想が受け入れられている。そこにエキゾチズム、オリエンタリズム的なものがないとは言えませんが、それは日本にいる限り、気づかない仏教の姿ではないかと思います。いろいろ質問なされたい方もあるかと思えます。

伏見先生は、私たちがよく知らない、チベットにおけるキリスト教モラヴィア教会の宣教師がチベット語の言語研究も行ってきたという、キリスト宣教の特徴を紹介されたご発表でした。19世紀ごろまでの話でしたので、その後のことなども知りたいと思いました。

劉先生は賀川豊彦と中国の関係のご発表でした。2009年が賀川の生誕100年にあたり、新聞で特集されました。特に関西では、賀川は神戸生協（生活協同組合）の生みの親としてその名前は比較的知られています。平和主義のキリスト教徒だということもよく知られています。けれど、今日のお話で、私は賀川と中国との関係を初めて知りました。そして、賀川が社会主義的というか、無神論でなければ共産主義がいい、愛による共産主義というのは賀川豊彦らしいとも思いますが、戦争中になって変化が生じたというあたりは非常に気にかかります。賀川豊彦と中国との関係についてはもっと教えていただいて、これから少し勉強してみないといけなと思いました。

午後の講演では大きな話が多くなりました。それぞれにスケールが非常に大きいだけに、いろいろな問題が提起されたと思います。中牧先生のグローバル宗教の経営とマーケティングでは、宗教というものがいかに人を獲得していくかということで、それがグローバルになってきたことを事例を挙げながら話して下さったので非常に説得力がありました。言葉だけを見ると、マーケティングや経営と宗教はどこで結びつくのかと思いましたが、非常に説得的でした。私からの質問ですが、やはり民族と言語の壁はそう簡単に超えられないと思います。ですから、グローバル化が起ころつつあることは疑い得ない事実であるとしても、逆の方向にもベクトルが働くのではないかと感じます。

次の土屋先生のお話にも関係するのですが、日本のナショナリズムや天皇制は議論しにくい問題で、まだ決着がついていません。グローバル化という形で新しい宗教のあり方が開かれたと同時に、そこで積み残しになっている問題も、同時に考えてみなければならぬだろうと思いました。土屋先生の「日本におけるキリスト教の宣教」では、日本のプロテスタント150年という何気ない言葉が含まれている問題にあらためて気づきました。これは沖縄やアイヌの人々が日本に統合されていく近代化の過程、国民性、ネーション・ステートができていく過程とも絡んでおり、彼らのアイデンティティの問題、ひいては日本人とは誰かという問題にも関係しています。ある意味ではずっと早くからグローバル化してきたと思われるキリスト教と、近代的な国民国家とその国民のアイデンティティとが衝突するとすれば、皮肉ですね。

最後に日本のキリスト教と中国と韓国との関係は、これからまだまだ研究してみなければいけない。一方で、東アジア共同体、あるいは東アジアという共通性に目を向けるベクトルが働く。これはこれですごく大事なことで、見過ごすことはできません。同時に、これは徐先生の話とも絡みますが、中国と日本、日本と韓国、韓国と中国がいかにキリスト教を受け入れたか、また韓国がすでに発信しているとしたら、その発信の仕方がいかに違うかも大事な問題です。

徐先生の話は、中国のキリスト教を国際的な視野の宗教研究の中で論じられたと思います。中国という共産主義国家でキリスト教が現実はどうしているかという話は、断片的な情報しか伝わってこない中で、今日は聖書の印刷の話も冒頭に出されて、新たに知ったこともありました。中国でキリスト教がどのようになるかについて、学者は何も予言することはできませんが、これからの動向の分析あるいは問題点の提起は可能だと思います。

そして、最後に言われたインターネットを使ったサイバー宗教の問題は、現代において無視はできませんし、ある力を持つことは事実です。これは警戒をし、研究もしておかなければなりません。同時に、中牧先生が言われたことですが、インターネットは非常に簡単に国境などのいろいろな枠を超えられるという面と、逆に生身の人間同士のつながりはどうなるのか。インターネットでは、話がすぐに国際的に流れるが、積み残される問題もあるはずで、その辺の問題はインターネットと宗教の問題を論じるときにも気をつけておかなければいけないと思いました。

本日午後の講演を通じて、布教や宣教はいろいろな状況に接触し、問題もあることを知ることができました。それでもまだまだ足りないわけですが、日本の国内だけで考えていると、これだけのことに気づきません。日本では、アメリカで仏教の瞑想をしている人が多数いることも知らない人が多いし、今、中国でどのように聖書が印刷されているかも知られていません。中牧先生の話にあったように、すでに創価学会（SGI）、世界救世教という日本発の宗教の話があるにもかかわらず、日常の私たちの意識の中で宗教の話題は出ませんし、宗教がそれだけ動いていることにも、日本では気づかないと思いました。

その意味で、文化交渉という視点から布教を考えてみたとき、日本は、一方で外向きの発信をしていると言いながら、韓国や中国に比べたときに、まだまだ何か内向きというか、外に向かう覇気がないようで、違いがあると感じました。その意味では、中国の先生方の話は非常に刺激的でした。

陶 午前の部の発表順で、フロアから質問を多く受けた方は最大5分、あまり受けていない方は3分以内に収めていただきたいと思います。まず、宮本先生にだいたい質問が出たようです。小田先生のコメントを含めて、ご感想とご意見をどうぞ。

宮本 いろいろ質問が来ているので、それに答えながら、小田先生のご指摘を含めて、お話ししたいと思います。

まず、細かい質問から。ハワイでは、宗教施設の建設、特に土地の取得は自由なのかという質問です。これはハワイに限らず、アメリカでは基本的に宗教や布教の自由がかなり認められています。その一環として、施設や土地の取得も自由です。ですから、宗教を理由に強い制限がかかることはないと思います。もし、場所によって制限があるとしても、それは日本の宗教だからという理由ではありません。

次の質問は、神社や鳥居は第二次世界大戦の被害者にどのように思われているのかというものです。この点は、確かに戦後しばらくは、神道であるというだけで、非常に風当たりやバッシングが強い時期がありました。ただ、神道関係者が中心となって、神社神道は必ずしも軍国主義ではない、特にハワイにおける神社は決して反米的な思想は持っていなかったということを繰り返し訴えました。長年の裁判闘争の結果、ハワイにおける神社神道は決して軍国主義的ではなかったと認められ、一時は没収されていた神社の土地や施設を取り戻しています。ただ、実際に被害に遭われた方の中には、神社や鳥居が日本の軍国的なイメージを喚起させるという人もあり、いまだに完全には払拭されていないと思います。

次に、お宮参りや結婚式や葬式といった日本の習俗がどの程度ハワイに持ち込まれ定着しているかという質問です。日本で行われている行事はほぼハワイでも行われています。初詣やボン・ダンスを紹介しましたが、七五三や新車のお祝いもあります。神社には実に多様なお守りがあり、星条旗の柄のお守りも売っています。このように、日本的な習俗が、特に日系人を中心にかなり受容されていると言えます。

もう一点、高橋誠一先生から「日本政府から土俗なものとして否定され、圧力を受けてきた沖縄や奄美の人たちの宗教あるいは信仰は、ハワイではどうですか」というご質問をいただきました。私はハワイ滞在中に、新宗教の教団を中心に仏教寺院や神道を回りましたが、沖縄出身の方たちの宗教を調査する機会はほとんどなかったのです。沖縄フェスティバルに行くと、非常に多くの人々が集まって盛り上がっていました。そういう面では、沖縄やウチナーンチュの文化によってエスニック・アイデンティティを支えている人たちが大勢いることは認識しました。けれども、沖縄や奄美の宗教が、どの程度ハワイの人たちの間に定着しているかということまでは、踏み込めませんでした。

ハワイには、人種や民族を超えて、霊的なもの、霊性、スピリチュアリティに対する感受性の強い人が非常に多いと感じました。この意味では、沖縄や奄美の土着の宗教、シャーマニズムのような宗教がハワイで広く受容される理由は大いにあるかと思われます。

陶 ありがとうございます。それでは岩本先生、お願いします。

岩本 私は簡単に感想だけ述べさせていただきます。皆様のご発表を聞いて、つくづく仏教は特殊な宗教だと感じました。私が言う仏教は「伝統仏教」のことです。伝統仏教とは基本的には戒を伝えていく仏教です。布教、宣教、伝道といろいろな言葉があるという土屋先生のお話でした。私は今日「布教」という言葉を使いましたが、仏教の場合はどの言葉もしっかりしな

い。一番ぴったり当てはまるのは、戒を伝えるという意味で「伝戒」という表現ではないかと思いました。今日、ローリー大道老師の禅マウンテン僧院のお話をしましたが、それは信者を獲得して拡大することが目的ではないのです。修行を希望する人がいても、動機が不十分であったり、条件や資格が整っていなければ、受け入れません。

ですので、新しい宗教やキリスト教は拡大に熱心ですが、本来の仏教はかなり性格を異にするものだと思います。今後は「伝戒」という言葉を使うのがいいのではないかと確信したというか、そう思いました。

今日はお話ししませんでした、「具足戒」という完全な戒は、非常に細かい作法を定めてブツダからずっと伝えられたものです。日本では、それがうまく機能しなかったので、日本にはこの意味での正統的な仏教はほとんど展開したことがないと最近思っています。私はアメリカへ行って初めて、仏教はこういうものだったのだと気づきました。このような発言は、日本では教団も多く、公にしにくく、議論しにくいところもあります。その結果、日本の仏教はますます世界のグローバルな仏教ムーブメントから外れていくところがあります。欧米で、今日お話ししました僧院のように、数はごく少ないけれども、非常に素晴らしいものができているのも事実ですし、それがいつか日本へフィードバックされるときが来るのではないかと期待しています。オウム真理教の事件がありましたが、若い人はやはり仏教に興味を持っています。彼らは実践に関心があるので、そういうものが正統的な形で日本に流れてくれば、きっと若い人は興味を持つのではないかと思っています。話が飛躍しましたが、そういう意味で、「伝戒」を大事にしたいと思っています。これで終わります。

陶 ありがとうございます。私は儒教を研究していきまして、「伝道」という言葉を使った唐の後期（8-9世紀ごろ）の学者、韓愈の書物があり、教える先生の責任を「伝道、授業、解惑」としています。つまり、道を伝える、学問を授ける（いまの「授業」と同じ）、学生の疑問を解くことだと記されています。次は、伏見先生お願いします。

伏見 今、「伝道」の話が出たのですが、伝道の「道」は、仏教のマールガですね。仏教のマールガというのは修行道で、それが漢字で「道」と訳されて、中国的に解釈されていったということだと思います。

私の発表につきまして、小田先生から、JaschkeやFranckeといった人たち以降、20世紀のラダック地方の布教活動はどうだったのかといったご質問がありましたので、その辺からお答えします。

第一次世界大戦の勃発とともに、モラヴィア教会のドイツ人宣教師たちはいなくなります。しかし、名前からするとフランス人でしょうか、ピエール・ビトーなどのメンバーが残っていました。記録があるものでは、1970年版の新約聖書はこのピエール・ビトーが監修しています。その頃までヨーロッパ人がいたわけで、ビトーはヨーロッパ人最後の宣教師でした。しかし、布教活動をしていったチベット人宣教師は何人かいて、その人たちは1970年以降も存続してい

ると言われています。

今日の発表では触れなかったのですが、ラダック地方では、キリスト教が布教されていただけでなく、イスラーム教徒がかなり入ってきて、彼らも布教活動を展開していますので、キリスト教徒の獲得という意味では、それほど数は増えなかったのではないかと考えました。

岩本先生のお話を私は非常に興味深く拝聴していたのですが、アメリカではベトナム戦争と仏教は、何か関係があるのかと常々思っていたのですが、実際どうなのか、もしご存じでしたら教えていただきたいと思います。

岩本 仏教とベトナム戦争ですか。それは仏教だけではなく、そのころに東洋の宗教がアメリカで活発化したというか、代替宗教として目を向けられたということはあると思います。それは仏教に限ったことではないと思います。

伏見 ありがとうございます。

劉 私は今回、日本の皆さんを前にして賀川豊彦についての研究発表をしましたが、中国語と英語の資料だけを使って、日本語の資料を使うことができなかつたことをとても残念に思っています。

私が中国でのキリスト教の流布の歴史を研究していて気づいたことは、キリスト教の中国伝来と布教は、単に西洋から中国へという方向だけではなくて、アジア内部の交渉、日中韓三国間の交流も重要な現象の一部であるということです。私たちアジア人同士の布教の動きもかなり早かったと認識しています。賀川の活動は東アジアのキリスト教史の中の一つの事例にすぎないのです。私の今日の発表を一つのきっかけとして、今後より多くの研究者がアジア内部のキリスト教および宣教師同士の交流史に注目し、研究を深めることができればと願っております。

中牧 フロアから、「宗教と靈性は違うのか」という質問です。普通、宗教は名前のある神や仏を崇拝し、教団組織をきちんと整えているものを言います。靈性の場合、固有の名前があってもいいのですが、特別になくても、例えば「宇宙の生命と合一する」とか「サムシング・グレート」と言う人もいますが、そういう存在を前提にして、むしろ、そういうものを通して、自分の考え方や態度を高めていこうとする方向性を持つものが多い。ニュー・エイジと呼ばれる運動で問題になるのはスピリチュアリティです。それは特定の教団や宗派とのつながりや信仰を強調しないもの、取りあえずこのように説明しておきます。

そういうものも含めて、グローバルに展開していく現象を私はグローバル宗教と言いました。より正確には、「グローバル化する宗教」がいいかもしれません。中国語では「全球宗教」という表現が徐先生の報告の中に出てきましたが、これまで世界宗教あるいは普遍宗教と言ってきたものとは少し違う観点のものです。特に1990年代以降、全世界を覆う現象としてグローバル化が言われていますが、そういう中で自らを鍛え育てて発展してきた、ある特徴を持つ宗教形態を指し示す場合に、「グローバル宗教」や「グローバル化する宗教」が多少の意味を持

っているのではないかと思います。

小田先生の質問にかかわるのですが、一方で、宗教自体もグローバルな問題や関心を持ち、グローバルな布教、禅の場合にはグローバルな「伝戒」が行われていますが、他方では逆に、グローバル化に対抗するアンチ・グローバリズムとは言わないまでも、自分の文化や民族性、ナショナリティを強調する運動や自己主張を行っていく動きが当然あります。私の勤めている民族学博物館は、諸民族の自己主張の運動を追い掛けているようなところがあります。両者はコインの表と裏のような関係で、どちらか一方に進むのではなく、グローバル化の中で両方向に進んでいく。そして世界は統一されるかのように見えて、ばらばらになっていく。この諸相をとらえていかなければならないという、なかなか難しいところに来ているのではないかと思います。

宗教自体もグローバル化を一方で推し進めながら、しかし、ローカルな文化の自己主張も認めていこうという矛盾した動きを示します。その一つのいい例は、土屋先生が最後に言われたインカルチュレーションという概念です。これはカトリックから出てきたもので、カトリックはその名のとおり普遍性を主張する宗教です。これまでは、カトリックが南米に布教に来て、カトリック諸国が植民地を作ったときに、魂の征服もするわけです。地上の征服と相まって、天国の征服もやるわけです。それはカトリシズムを全面的に押し出して、布教強化に当たってきたのです。

しかし最近では知恵を付けて、「インカルチュレーション」という言葉をあみ出したのです。それは、「先住民族の文化を大切に、カトリックの教義や儀式を押し付けません。どうぞ、あなた方が自由に、独立して自律的に、文化や宗教を選んでください」という姿勢で、現地の社会に入っていきます。そのキーワードがインカルチュレーションで、それは民族文化の自己主張につながっていく。こういう両面作戦を採っているのが現代だと話したところで、土屋先生に振りたいと思います。

土屋 小田先生のコメントも含めて、かなりたくさんご質問をいただいております、一つずつお答えすると煩わしくなるので、できるだけ総括的にお答えできればと思います。

まず最初に、「福音派とファンダメンタリズムはどう違うのか」というご質問があります。この問いに答える前に、一般的に、宗教に関する学術用語は、造語された当初の意味合いから、使われているうちに次第に変わってきます。プラス・イメージの方向に変わることもあるかもしれませんが、マイナス・イメージを帯びることが非常に多いのです。ファンダメンタリズムという用語もそのいい例です。これは現在ではかなり広く使われて、宗教学用語にもなっていますが、もともとは第一次世界大戦後のアメリカ合衆国におけるプロテスタントの特定の傾向の呼び名でした。彼らのグループが出していた雑誌の名前が『ファンダメンタルズ』で、人々が彼らの思想を「ファンダメンタリズム」と呼び始めた。つまり他称です。その他称にすでにマイナスのイメージが付与されていた。「ファンダメンタルズ」はキリスト教の最も基本

的な教義だと、その一派は主張していたわけです。けれども、その内容は、例えばマリアの処女懐胎を文字どおりに受けとめ、イエスの昇天も本当に天にすーっと昇って全能の神の右に座したと彼らは信じている。リベラルな人々から見ると、彼らは非常に頭の堅い連中だという意味でファンダメンタリストと呼んだ。ここに他称としてマイナスの響きを持っています。

さらに悪かったのは似たような現象は世界的に広がり、イスラームのある現象を非イスラーム圏の人たちが、イスラーム・ファンダメンタリズムと呼び始めた。しかも悪いことに、日本語では原理主義と訳し、この原理主義がいつの間にかテロリズムと同じような意味になってきました。それで、ますますファンダメンタリズムは何か悪といったニュアンスを帯びてきてしまったのです。

かつてアメリカでファンダメンタリストと呼ばれた人たちの中にはかなり良心的な人もいました。そういう人たちは、その後、自分たちの主張をファンダメンタリズムと呼ばれるのを嫌がり始めた。イスラームの方でも、イスラーム・ファンダメンタリズムと呼ぶのをやめて、イスラーム主義と呼び始めたそうですが、キリスト教の方も同様です。

他の呼び名を工夫する過程で、エバンジェリズムが出てきます。これは日本語では「福音派」と訳すしかないわけです。けれども、キリスト教は全部、「福音」なので、難しい話になりました。当事者たちは純福音主義団体と自称しますが、そうするとあたかも不純な福音主義があるようで、これも難しい話になってきました。したがって、福音派とファンダメンタリズムの違いを概念として区別することは非常に難しい。実際にこのように使われているということです。

ただ、現在、日本のわれわれが福音派と呼んでいるグループは、第一次世界大戦後のアメリカにおけるファンダメンタリストとは違います。アメリカの保守派の一部はある意味ではファンダメンタリズムと言われていますが、日本の福音派はその人たちと政治路線を逆にしていて、前の（ブッシュ）大統領の方針を支持していません。そういう意味においても、微妙な相違がありますので、個々のケースに応じてこの問題は考えなければならない。十分な答えになっていませんが、これが答えです。

次の質問、「福音派の中は、一枚岩ではないのではないか」も同じで、おっしゃるとおりです。これに対しても、カトリック教会が一枚岩でないと同じように、福音派も一枚岩ではないと答えるしかありません。カトリックは先ほどおっしゃったように普遍主義で、あたかも一枚岩の典型のように言われますが、必ずしも一枚岩ではありません。それと同じように、福音派も一枚岩ではないのです。

ただし、連合組織の機能というレベルで考えますと、福音派は結構よく機能しています。特に現在では一緒にやろうという方向で随分努力していますので、日本福音同盟（JEA）はかなりいい働きをしています。この意味では、カトリックより一枚岩かもしれないという感じがしないのでもないのです。しかし、世の中のどの派にせよ、一枚岩だというのは、大体おかしい

ので、すべて一枚岩ではありません。その程度で、これもやはりケース・バイ・ケースで考えなければならないと言わざるを得ないのではないかと思います。

それから、もう一つ「韓国にはなぜキリスト教徒が多いのか」。これはいつも出る疑問で、重要な質問ですが、答えにくい。特に日本のキリスト教会から時々この疑問が出ます。この疑問を出す動機は、自分らもあのようにになりたいからでしょうが、それはほぼ無理なのです。いろいろ基本的条件が違うのです。簡単に断定はできませんし、また異論もありますが、例えばよく挙げられる原因の一つは、韓国という国の名前では不適切ですが、北方アジアから朝鮮半島にかけてシャーマニズムがかなり強い。つまり、霊的なものを非常に重んじることが、キリスト教を受容する仕方と非常にうまく重なり合うのです。「ハン（恨）」という言葉が韓国の人たちはよく使いますが、こういう問題はキリスト教とうまく合うのです。

さらに、韓国のキリスト教の中心になった神学は、民衆の神学と言われています。これは、日本に対する抵抗運動、抗日運動とも連動しながら形成されてきたものであって、ナショナリズムともつながります。とにかく韓国の人たちが自分たちのアイデンティティを作り上げるのに最も適していた宗教がキリスト教だったのです。これは、日本とは非常に大きく違うところです。中国のキリスト教の広がり方にもいろいろありますが、やはりこの点では共通した部分があります。結局、日本のキリスト教にはシャーマニズムもナショナリズムもないので、条件がそろっていないのではないかと。ただし、今韓国とっている地域の伝統がキリスト教受容にプラスに働くとするならば、北朝鮮が今後どうなるかは大きな問題であり、すぐに答えは出ないでしょうが、面白いと思います。

これらが主な質問に対する私の答えです。最後にもう一点。徐先生のお話の中に出てきました聖書の印刷について。これは私も知りたいことですが、日本のキリスト教の一部が、中国では聖書が十分行き渡っていないというので、募金活動をして、中国に聖書を送る会をかなり最近までやっていました。これが中国で一体それはどう処理されたのだろうかというのは興味があります。

陶 ありがとうございます。今のお二人の先生は、今日の共通の問題・課題に対して深い分析をされていました。このことに関しては、後でまた総合討論したいと思いますが、その前に徐先生にお願いしたいと思います。

徐 私に多数の質問が来ていますが、第一の質問は、「中国の共産主義というイデオロギーの下では、宗教はアヘンとされているのか、それとも完全に自由なのか」。いずれでもないというのが私の答えです。宗教に関する制約は一般的に言うと、かなり複雑でして、政府と社会の両面からの制約が考えられます。中国では政府の制約はかなり多いので、欧米のメディアはよく、中国には宗教の自由がないと批判します。しかし、社会からの制約はなく、まったく自由です。それは中国の文化や伝統に関係しています。ですから、共産党政府はいつも西洋側への反論として、中国では宗教はとても自由だと言いますが、それは実は中国の社会的伝統を自

分たちの功績にすり替えているのです。しかし、一般的に言うと、社会における宗教の自由は確かに政府の政策と関係しています。インドでは、政府の制約は少ない代わりに、社会伝統からの制約は多い。ですので、逆に私からの質問になりますが、一体、中国の方が自由なのか、それともインドの方が自由なのか。どちらの面から見るかによって、自由度は違って来るだろうということです。

次に、「サイバー宗教においては、教義や教典や戒律はあるのか」という質問と、「サイバー宗教においては、人間同士の生身の交流が足りないのではないか」という小田先生からのコメントにまとめてお答えします。サイバー宗教には二つの種類があります。一つは教会が現実にあつて、教会で行われる儀式などをネット上に載せるタイプです。このようなサイバー系宗教は普通の宗教教団と何ら変わりはありません。もう一つのサイバー宗教は、現実社会に何も存在せず、ネット上で、仮想状況に作られた宗教です。そういう宗教には、教義はありますが、自分たちが作ったものです。サイバー宗教においては、人間同士の交流は少ないのは確かで、サイバー宗教は伝統型の宗教の新しい形の代わりとはなり得ません。

中国では、サイバー宗教に関する変圧器の理論があります。宗教を変圧器に譬えます。なぜならば、宗教は民衆を動員するものなので、一つの事件を大きく拡大させる機能を持っているからです。その意味で、中国政府は宗教に対してとても神経質になっています。しかも、ネットはもっと大きな変圧器で、それは宗教の問題をさらに拡大するからです。ですので、政府もそれに対してはとても心配しています。ただし、人々の情報源に関する最近のアメリカの調査によりますと、伝統的な媒体である新聞やテレビから得た情報が個人の情報量の90%を占めていて、ネットはただの10%にすぎないという結果がありました。

次に、私は発表の中で、中国では五つの宗教が公認されていると言いましたが、ではチベット仏教やイスラームは認められていないのかという質問です。チベット仏教は仏教の一部ですので、問題なく公認されています。イスラームも大丈夫です。法輪功は論外です。政府の言い方では、法輪功は良くない宗教、要するに「宗教ではない」と定義しています。私たち研究者は、いろいろな人間がいて、どんな人間でも人間だと認識しています。したがって、中国の学界は政府の法輪功に対する政策を支持していません。

もう一つの問題は、「儒教、仏教、道教の、中国におけるこれからの展望」についての質問です。今、中国では仏教の発展が最も目覚ましいと私は認識しています。西洋からは、今、中国ではキリスト教がとても活発化していると言われていますが、それはやや誇張されているのではないかと思います。今、仏教界と政府との関係はとても良好です。仏教の発展において問題となっているのは、政府の政策ではなくて、もし問題があるとすれば、それは内部の腐敗です。道教が中国の五大宗教の一つとなったのは、偶然性によると認識しています。いわゆる正統道教の信者の数はとても少なく、1%にも満たないのです。五大宗教の一つとなっているキリスト教の発展は政府の恩恵にあずかることが多いと思います。台湾と香港では、キリスト

教の拡大はそれほどではなかった。なぜならば、そちらには共産党政府がないからです。宗教は弾圧を受けて逆に強くなるという性質を持っていますので、中国大陸ではキリスト教に対する制約・弾圧があるからこそ、逆に発展を遂げているということです。もちろん、迫害にも限度がありまして、あまり行き過ぎても駄目です。

もう一つ、「日本では政教分離という憲法の規定があるので、小中学校では宗教教育は行われていないのですが、中国はどういう状況ですか」という質問があります。中国も同じ状況です。小中学校では宗教教育は行われていません。教育の分野において、共産党政府による最大の成果があるとすれば、それは無神論の教育です。海外にいる中国からの留学生の多くは、すべてではないですが、二つの特徴を持っています。彼らはいろいろな知識を持っていますが、二つの知識が欠けています。一つは宗教で、もう一つは芸術です。このことに皆さんも恐らく気づかれているだろうと思います。

しかし、その状況も近年は変わりつつあります。中国の大学では近年、宗教教育の重視が顕著に進んでいます。それは、私たち研究者側が政府を説得し、そういう進言をしてきたことも関係しています。宗教教育がなぜ大切なのかというと、四つの理由があります。第一に、宗教は知識のとても重要な一部だということ、第二に、宗教は人間の包容力や寛容性につながる。第三に、宗教は世界的な一つの潮流となっていて、世界の人々がみんな多かれ少なかれ宗教とかかかわっているのに、中国の人だけがそういう知識が欠けると、とても不利だという状況になってしまいます。第四の理由は、中国の対外的なイメージを改善する点において、大学教育において宗教を盛り込んだことで、中国はとても自由だというイメージを作り出していく意味があります。

陶 大変活発な議論が展開され、ありがとうございます。われわれのCOEでは渋沢財団寄付講座も同時に進めています。私が渋沢に関する研究の中で気づいた一つのことは、ほぼ百年前の1912年、渋沢栄一および当時の宗教学者、姉崎正治、井上哲次郎、それから同志社大学のアメリカ人講師などにより帰一協会が作られました。その目的は宗教間の融和を図ることで、今のわれわれの関心にもつながっています。今日の発表が示されているように、一方では、宗教のグローバル化が進行し、他方では、アイデンティティに関する自己主張も強まっています。

宮本先生が整理されたハワイの複合的なアイデンティティには、ナショナル・アイデンティティに加え、ローカルのアイデンティティ、エスニック・アイデンティティ、さらに宗教的なアイデンティティがあります。この複合アイデンティティと、グローバル化つまり全球化・地球化しつつある宗教について、最後にお一人ずつ短くコメントか感想を述べていただきたいと思います。では、宮本先生から。

宮本 複合的なアイデンティティの一部に、グローバル化の要素も入っているのではないかと考えます。それがアイデンティティの複合化をさらに促進させる側面もあると思います。しか

し、グローバル化の均一化の流れの中で、ローカルなものにより強くアイデンティティを求めていこうとする傾向も出てくるのだと思います。中牧先生が指摘された両面性がはっきりと現れつつあるのが現代の潮流ではないかと感じております。

岩本 最近、ユダヤ人の仏教受容について少し調べていました。ユダヤ人が中心になってアメリカ仏教を形成してきたように見えるのですが、やはり仏教を実践するときに、ユダヤ人は自分のアイデンティティの問題で悩むのです。その現れ方は人それぞれで、一定していないのです。ある人は、仏教の瞑想を実践することによって、より深いユダヤ性に目覚めて、ユダヤ教に戻っていく。ものすごく濃厚なユダヤ家庭で育った人が、仏教一チベット仏教が多いのですが一を実践する場合、最初は悩むのですが、次第に気にならなくなる。そのアイデンティティはユダヤ人だけでも、実践は仏教だとなる人もいます。このように個人差があり、仏教的に言えばカルマの問題であって、多様なのではないかと思います。

陶 今のお話は多分、中牧先生の述べられた宗教の商品化、消費される宗教にも少しはつながっているかと思います。それでは、伏見先生。

伏見 なかなか難しい質問で、お二人の先生が今、ハワイやアメリカのことを紹介されたので、私もここではヨーロッパの話します。やはりヨーロッパでも、アメリカと同じように、日本の宗教集団はSGIなど、いろいろな組織のグローバル化が進んでいることは確かです。しかし、その反面、日本人が日本人会とかいう形でアイデンティティを持ってつながっていくこともあります。日本的な宗教においては、まだまだローカルな部分はあるでしょう。けれども、将来的に、これが日本人だけを対象にしているわけではなくて、ヨーロッパにいる他の人たちということで、やはりグローバル化が進んでいくのかという感想です。

劉 人間における複合的なアイデンティティという問題について、今日の発表で挙げた賀川豊彦も日本人としてのアイデンティティとクリスチャンとしてのアイデンティティとの間での葛藤を経験したといえます。大きな転換点や事件がないときは、その二つのアイデンティティは平和に同居することもできたのですが、非常時には、賀川もすごく苦悩された状況もありました。賀川豊彦は*Christ and Japan* (Friendship Press, 1934) という本で、クリスチャンであることと日本人であることの二者択一をどうすればいいのかという自分の苦悩を描いており、結果として、日本人としてのアイデンティティを選択しました。

小田 ちょっと口を挟みますが、内村鑑三が「二つのJ」と言っていなかったですか。ジャパンの「J」とジーザスの「J」。賀川豊彦も言っていたのでしょうか。

劉 これはかなり普遍的な問題で、日本人の問題だけではなくて、中国では「二つのC」といった表現をしています。

中牧 クライストとチャイナか (笑)。なるほど。

陶 日本人は「二つのJ」から選択し、中国人は「二つのC」から選択すると言います (笑)。

中牧 今日は中国の先生方から、いろいろ新しい情報を教えていただいて、とても参考になり

ました。中国は今、閉鎖的なマーケットからオープンなマーケットになりつつある。そういうグローバルな流れの中で、中国が政府として、国家として、何を打ち出そうとしていくのか。宗教に対して、どういう態度を取っているのかということが、かなりよく見えてきたと思うのです。

その中で、私は少し孔子についてお伺いしたいと思っています。中国政府は、まさにソフトパワーで、孔子を国策として非常に高く評価する。昔の文化大革命のときの批林批孔を裏返したように、孔子を持ち上げている。中国語と中国の文化を学ぶための孔子学院を全世界的に作ろうと企画しています。国策として、そういう文化政策を打ち出している。これは必ずしも宗教とは言えない、靈性とも言えない。文化が一番近いのだろうと思いますが、そういう文化政策の中で、孔子を打ち出している。このことの持っている意味を、どのようにお考えなのかをお伺いしたいと思うし、私から見ると、これはグローバル化の中で、中国がハードパワー、軍事的なパワーではなくて、中国を代表する文化人、教育者として孔子という人物をどんと出していく。それに対して、では日本から誰を出せるのか。聖徳太子か、それとも紫式部か(笑)。

陶 芭蕉。

中牧 芭蕉ですか(笑)。といったことで、なかなか難しい問題があるなと私は思っています。質問とコメントです。

土屋 グローバル宗教という中牧先生の表現について、ちょっと発想を変えてコメントを。カトリックというのは普遍化で、カトリシズムはまさにグローバル宗教を目指してきたと言えます。そうすると、よほど宣教、布教、伝道に関心を持たない宗教でない限り、ほとんどの宗教がグローバル宗教を目指している。しかしながら、にもかかわらず、ほとんどの宗教が、実はカトリックがその普遍特殊でつまずいたように、特殊を普遍化するというやり方で、つまずくと思います。

したがって、これからのグローバル宗教が展開するときは、いろいろな宗教集団が秘めていた普遍化という動機を表に出して大いにやり合う中から、実は、それぞれが相対化されていく時代に入るのではないか。それが共存(シェアリング)と言われた意味ではないかと思うのです。結局、普遍が特殊ということに重なってしまうのと同じように、これからの宗教集団のあり方は、グローバル化と同時に、自分たちは世界の諸宗教の中でどうあらねばならないかということを考えざるを得なくなってくるのではなからうか。そして、実はそれは内面的には、先ほどのインカルチュレーションといった形で展開していくということではなからうかと私は思っています。

徐 孔子学院については、中国の内部でも論争があり、評価する人もいれば、そうでない人もいます。歴史上の人物を自国の文化のシンボルとするということは、別に中国の発明ではなくて、アメリカでもドイツでも、日本でも、日本は漫画に代表されるようなポピュラーカルチャーで、そういうことは世界中でやっています。

中国は1960年代から対外的な活動を展開しています。今までにアフリカに3万人ぐらいの医療チームや医療スタッフを派遣しています。このような貢献はアメリカのNGOや国連の平和維持活動（PKO）の活動に匹敵すると思います。そういう活動も、どのような文化的な価値観を外部に伝えていきたいのかが重要だと思います。しかし、医療チームの派遣にしても孔子学院にしても、確たる文化的価値観が見えてこないのは問題だと思います。世界でもいろいろな反応がありまして、例えばベトナムは孔子学院を受け入れない態度を示しています。現在では、多くの学生や研究者が孔子学院について論文を書いているので、孔子学院のこれからの方向も恐らく見直されていくだろうと思います。復旦大学は、今、スペインの四つの孔子学院と提携関係を持っています。しかし、教員はあまり向こうに行きたがりません。なぜならば、向こうだと給料が低い（笑）。また、キリスト教の宣教師のように、一つの文化を伝道しようという精神に欠けているので、そういう状況に留まっています。いずれにしても、対外的な交流活動はいろいろなメリットを持っていると思います。以前の共産党政府は、宣教師など外国から入ってくるものを文化の侵略と見ていました。しかし、今では自分たちも海外に孔子学院などを作っているのです。共産党政府も変わりつつあります。

アイデンティティの問題については、皆さんのご意見に私も賛同していますが、いろいろなレベルのアイデンティティがあり、その中でも宗教的アイデンティティと、民族の帰属意識は強いと思います。それに比べると、文化への帰属意識はわりと弱いので、文化のために極端なことをする人は恐らく少ないだろうと思います。

陶 最後に、今回のシンポジウムの企画者である小田先生に、簡単な総括をお願いします。

小田 グローバル化する宗教も含めて、現在起こっている新しい動きや現象を新しいこととして認めることは大事です。宗教の普遍性に関しては、土屋先生が言われたとおりで、私は非常に疑わしく思ってきました。どの世界宗教も民族を超えられなかったからです。バベルの塔の失敗以来、世界宗教は二千年間、「人類よ」と語り掛けてきたが、民族はそのままにとどまっている。その歴史的現実を知っておくことが大事です。

この状況において、私はまさに違いがある中で共生していくしかないと思います。グローバル化の動きは否定できませんが、そんなに簡単でもありません。布教の具体的な事例が挙げられたことで、宗教が現代でも動いている、生きていろいろな活動していることが分かりました。その事実を日本人に理解してもらうことが一番大事だと私は思いました。

陶 今日はパネリストの先生方、またフロアからの参加もあって、非常に情報量の大きい、また質の高い議論ができました。ぜひ、今の討論も含めて一冊にまとめたいと思っています。それでは、今日はこれもちまして終わりたいと思います。